

令和 2 年度

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370300196		
法人名	社会福祉法人三陸福祉会		
事業所名	認知症高齢者グループホームさんりく		
所在地	〒022-0101 岩手県大船渡市三陸町越喜来字所通91		
自己評価作成日	令和2年10月15日	評価結果市町村受理日	令和2年12月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当事業所は、多機能ホーム・ディサービス・特別養護老人ホームと併設になっており、昔からの知り合いの方々の利用が多いので、いつでも一緒に会話をしたりお茶を飲んだりと交流を持つことができます。地域交流では、こども園・小学校の運動会や発表会の招待を頂き観覧を行ったり、地域合同の敬老会に参加して楽しく過ごされています。また、利用者の主治医と常に連絡を取り合うことで利用者は安心して生活を送っています。職員は基本理念「ゆったり楽しく、その人らしく」を心掛けながら日々の介護に努めています。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

東日本大震災後に現在の高台に移転新築7年が経過した。敷地内には、事業所のほか同じ法人の特別老人養護ホーム、小規模多機能ホームが併設され、防災訓練や敬老会等季節の行事も、各事業所合同で地域に溶け込む姿勢で行っている。建物内部に「地域交流ホール」が整備され、災害時には地域の避難場所に指定されており、地域の敬老会、夏祭りなど住民の交流の場にもなっている。地域診療所の医師は、長年にわたり利用者の健康管理に携わっており、かかりつけ医として利用者、家族、職員からの信頼が厚く、さんりく地域の医療福祉の中心的役割を担っている。近隣には小学校、こども園があり、運動会や学習発表会、クリスマス会などの交流があり、地域の世代間交流の場ともなっている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和2年11月12日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている ○ 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外に行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが ○ 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関やホールに掲示し職員が常に理念を確認できるように努めている。また、会議の時に理念を確認し共有できるようにしている。	地域と共にその人らしくを理念とし、毎年具体的目標を掲げて取り組んでいる。新人の研修時、毎月の職員会議の際に再確認を行い職員には十分周知されている。研修では、「福祉とは何か」に始まり、利用者の暮らしの再構築に向けての具体的支援について話し合っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	こども園や小学校の行事に招待を受けて参加し交流を図っている。また、事業所と地域の敬老会を当施設で合同で開催し地域の方々と繋がりを継続できるようにしている。今年はコロナの感染症対策の為中止している。	施設内にある、地域交流ホールは災害時の避難場所に指定されており、日頃から行事などに利用されていて、地域の交流の拠点となっている。現在はコロナ禍で交流は中止となっているなか、近隣の小学校、こども園から手作りメッセージが届いている。	小学校、こども園との交流は事業所からも、がんばれエールを送り、今後も継続されるよう期待します。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域住民から相談を受けた時は丁寧に対応するように心掛けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の委員は、地域の主たるメンバーで構成し事前に議題を決めて取り組むようになっている。各委員からの率直な意見を聞きながらサービス向上に繋げている。	市・地域等女性5人を含め、警察・消防の参加を求めながら、外部評価・防災訓練・事故報告等を議題として、併設の小規模多機能ホームと通例年6回合同で開催している。委員からは、地域の一人暮らし世帯への情報提供や職員の悩み事への相談対応等に対する多様な意見のほか、防災訓練にも参加し、改善点なども提言いただいている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には市の担当者が出席しているので、事業所の考え方や現場の実情を報告している。市の担当者からは地域の高齢者の状況について情報を聞く等関係作りにも努めている。	市長寿社会課には、運営推進会議の委員を依頼し、事務手続き等の際に情報交換も行う関係にあり、同課とは円滑な意思疎通が出来る関係にある。地域包括支援センター主催の地域ケア会議に施設長が出席し、各事例の検討会など行い、持ち帰り職員へ周知している。	

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関の施錠を夜間のみ行っており、身体拘束は行っていない。利用者は自由に動くことができるように所在を確認しながら見守っている。スピーチロックについても、職員同士で意識し合い職員会議でも話題とし全員が留意するように心掛けている。	法人の「身体拘束等適正化のための指針」により、毎月委員会を開催し、月毎の職員会議で個別ケア・困難事例を確認の上趣旨を徹底している。センサーの使用はなく、玄関などの日中の施錠は行わず、利用者の尊厳を保つよう見守りで対応している。馴合いによる、スピーチロックは特に注意している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされないよう注意を払い、防止に努めている	利用者を尊重し、毎日のケアに対応している。身体的虐待・言葉の虐待について、マニュアルを確認したり職員が互いに注意を払っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、権利擁護の制度を利用している利用者はいないが、勉強会を行いながら必要とされた時に対応できるようにしたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	サービス利用開始前や介護保険改正の時は、必ず家族に丁寧に説明を行い理解納得が頂けるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月家族が来所する機会を設け、事業所は利用者の状態を報告したり、家族から意見や要望を聞くように努めている。	面会時の話の中で意見や要望を伺っていたが、面会制限によりそれも出来なくなった。職員のリーダーが、毎日の利用者個々の暮らしの様子を「一行日誌」として記載し家族に送付している。利用者本人の意向もあり、紙オムツからパットに替えた例もある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職員会議や朝の申し送りの際に職員から意見が出され、利用者が心地よく生活できるように一緒に検討している。	毎日の申し送り、毎月の職員会議で意見・提案が出されている。利用者の暮らし方、介護に関するものが大半となっている。直ちに具体化できるものは、施設長の判断で行ない、必要に応じ法人に協議している。シフト・利用者の部屋配置等に反映している例もある。	

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤務状況を把握し、無理のない勤務体制に配慮している。また、コミュニケーションを取りながら仕事にやりがいを持って働けるよう努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内で研修会を開催して、職員の知識や技術の向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内で職員同士が交流できるように研修会やカフェが開かれた。外部の研修や交流会はコロナの感染症対策の為に控えている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスを開始する前に何度か本人や家族等から情報を収集しカンファレンスを行い、利用者が安心して生活を送ることができるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービスを開始する前に何度か家族と面談し、じっくり話を聞くように心掛けている。様々な思いを受け止め、少しでも不安が解消できるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族の話に身を傾け、一番困っていることや何が必要かを見極めて、他のサービスについても丁寧に説明を行い不安や悩みの解決に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	行動や精神状態・身体状態がその日によって異なることがあるが、その都度本人や表情や言動・行動から思いをくみ取りながら信頼関係が作れるように努力している。		

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	月に一度来所して頂き本人の状態を把握して頂くことや本人を支援していくために必要なことを家族と一緒に考えるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの場所や把握に努めている。親戚や知人が事業所への来所についても声掛けしたり、外出やドライブを行っていたが、今年はコロナの感染症対策の為中止している。	いつもは近所の散歩、買い物に出かけていた。面会制限により、家族や知人へ電話や手紙で連絡出来るように支援している。近所の理美容院が外向いて、施設内の理容室で整髪してくれるが、家族同伴で本人が希望する地元美容室に出かけられるようにも配慮している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士で気が合う合わないがある為、座席の配慮を行っている。また、一人である利用者に話しかけて寄り添うこともある。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	身体機能の低下により、家族と相談した上で特養に入所したが、入所後も必要に応じて相談等の支援に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の中でコミュニケーションを図りながら本人の希望に添える支援ができるように心掛けている。困難な場合は、行動や表情から読み取ったり家族と相談しながら対応に努めている。	言葉による意思表示に難がある利用者が多く、入居時に把握した生活歴も参考にしながら、うなづき等の行動・表情や家族の要望等から本人の意向を把握している。同じ建物内の他事業所利用者との会話や、入浴時の職員との会話から本音を引き出している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人との会話の中から聞き取りを行ったり、家族や前に関わったサービス事業所からも情報を収集し確認しながら把握するように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の生活の中で状態を観察し把握に努めている。普段と状態が違うことに気付けるようにケース記録を確認し申し送りを行いながら職員間で共有できるように努めている。		

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員で話し合いを持ちながら本人や家族の考えも汲み取り介護計画を作成している。会議やミーティングにモニタリングを行いケアの見直しを行っている。	基本的に6ヵ月毎の介護計画の見直しとしている。モニタリングは3ヵ月毎に行い、目標値を確認・変更している。介護度の変更に際しては、地元診療所の医師と相談の上で、変更の認定までの間は暫定計画としている。介護計画の検討は、ケアマネを中心に毎月の職員会議で行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	申し送りノートやケース記録を活用して情報を共有している。状態の変化によって会議やミーティングで見直しを行い介護計画を見直している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々ニーズに合わせて家族と相談し、職員間でも話し合いながら、臨機応変に支援できるように努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地元の商店街や診療所の利用、理髪店の訪問により協力を頂きながら取り組んでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人家族の希望によりかかりつけ医を決めている。定期受診以外でも、状態により往診対応も行っている。主治医と家族が面談することもあり安心して生活を送っている。	利用者9名全員が協力医の越喜来診療所をかかりつけ医として内科・歯科を受診し、うち2名は訪問診療も受診している。通院時は、小規模多機能ホームとの調整のもと職員が同行し、電話で家族に受診結果の報告を行っている。看護師の職員も随時対応している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	受診介助は看護師が対応している。日々の状態を適切に主治医に伝えて指示を頂くようにしている。職員は利用者の状態変化に気付いた時はすぐに看護師に報告を行っている。		

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時は医療機関と連絡を取り合い状態の把握に努める。退院の時期も病院と家族が話し合いを行いスムーズに受け入れができるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事前に「看取り確認書」を記入して頂き、家族の希望の把握に努めている。状態に応じて家族と主治医の面談があり、事業所のできる部分を理解して頂いた上で対応している。	入居の際に、家族に「看取り確認書」を説明し同意を得ている。重度化した場合には、家族の意向を改めて確認、協議している。事業所の近くに住む職員の看護師が状況に応じて対応し、地元診療所医師(嘱託医)からも協力をもらっている。法人特養と一体であるため、利用者の身体等の状況変化に沿って、連携した対応が可能となっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急連絡体制図やマニュアルを作成し周知徹底を図っている。応急手当や初期対応については内部研修で対応の確認を行い、定期的訓練で身に付けられるように努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人の防災計画のもと避難訓練を実施している。運営推進委員も参加し、夜間を想定した訓練も行っている。地域の福祉避難所の指定を受けているので、地域の防災対応の拠点として機能することができるように努めたい。	法人防災計画に基づき、例年は年2回運営推進会議委員や地域住民等の参加を得て、夜間想定訓練を含めて実施している。今年はコロナ禍のため職員、利用者のみで秋には火災消化訓練、12月は総合訓練を計画している。地域交流スペースは地域の避難場所に指定されており、自家発電設備、災害備蓄品などのほか3日分の食糧を備蓄している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は利用者の性格や状態を把握し対応を行っている。排泄や入浴の時の配慮はもちろんのこと、言葉遣いにも十分注意しながら対応している。	排泄誘導時や入浴時、居室入室時には、声掛けやドア閉め、異性職員対応時の利用者の意向確認など、個々の尊厳、プライバシーに配慮している。普段の何気ない会話でも、改めたほうがいいと思われる言葉遣いには、朝礼、終礼時お互いに注意喚起し合っている。職員は、利用者を人生の大先輩として、尊敬して接する姿勢を意識しながら対応している。同性介助の希望者はいない。	

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	毎日の生活の中でコミュニケーションを図り、利用者に指示するような声掛けではなく自己決定できるように話しかけるように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	事業所の理念のとおり「ゆったり 楽しく その人らしく」をモットーに、利用者の状態を把握しそれぞれのペースに合わせて柔軟な対応ができるよう心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者は衣類を自由に選んで脱ぎ着できるように、職員がタンスの中を整えている。季節に応じて衣類の入れ替えも行っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者の好みを把握し、どのように調理して食べていたか聞きながら支援したり、利用者によっては簡単な作業を職員と一緒にやっている。	法人の管理栄養士のアドバイスを得ながら、職員が献立を作成している。楽しく食べることを大切にし、利用者の希望を調理方法等に活かしている。利用者も、盛り付け・下膳・食器洗い等、職員と一緒に手伝っている。おやつは利用者からおいしいと好評である。食事前の口腔体操を済ませた利用者の「いただきます」の元気な声が聞こえている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量や水分量を観察し記録している。献立については調理担当の職員がバランスを考えて提供している。また、毎月管理栄養士に献立表を提出しコメントを頂いている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に声掛けを行い口腔ケアを行っている。一人できない方には職員が対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェックを行い、個々の排泄パターンを把握し定期的に声掛けしながらトイレ誘導を行っている。また、利用者が尿便意のサインを出すことがあるので見逃さないようにしている。昼夜の排泄用品の工夫をしながら対応に努めている。	オムツ使用は1名のみで他は自立している。排泄チェック表により各人のトイレに行きたい意思を把握・尊重しながら誘導している。夜間は半数がオムツを使用しているが、紙オムツから布パンツに改善した例もあり、現在の状態を低下させないよう声掛け、誘導介助を行なっている。	

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄チェックを行い排便の把握に努めている。乳製品を提供したり、下剤が処方されている方は主治医の指示通りに服用し有無を確認している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回の入浴を基本として曜日を決めて対応しているが、利用者の体調によりずらすこともある。普通浴槽での入浴が難しい利用者は、小規模多機能のリフト浴で対応している。	週2回を基本としつつ、利用者の希望に沿って入浴日を変更するなど、本人意思に応じた対応に努めている。5名が事業所の普通浴槽を使用し、浴槽を跨げない4名は小規模多機能ホームの特殊浴槽を利用している。利用者は、昔の話、子供の話などを職員としながら寛いでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は利用者によって居室やソファで休息が取れるようにしている。また、また、夜間も個々の時間に合わせて、職員と団欒しながらゆっくり入眠できるように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の管理は看護師が行い、誤薬防止のため必ず職員2人で確認してから服用させている。看護師から介護員へ薬の効能や副作用について指導を受けながら把握に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	季節の塗り絵や作品作りを行ったり、多機能ホームへ行き馴染みの人達と会話を楽しんでいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	個々の状態に合わせて外出の支援を行ったり、家族の協力のもと自宅に帰省していたが、今年はコロナの感染症対策により機会が減っている。	例年は、道の駅での買い物、花見、紅葉狩りなど季節の移り変わりに応じてドライブに出かけていたが、今年はコロナ禍のため、外出の機会が減っている。その中で、マスク等しっかりと感染症対策を講じながら、外出制限まではしないようにしている。室内では、換気に気をつけながら、皆で歌を唄ったり、折り紙、貼り絵のほか、体操やゲームで体を動かし利用者のストレスを和らげるよう努めている。	

令和 2 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者の中でも少額でも持っているという方もいるので所持させている。また、家族からお小遣いとして事業所で預かり、欲しい物がある時は預かりで対応している。家族には毎月「金銭出納簿」「確認書」を送付し確認して頂いている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者から電話を掛けたいと希望があるので対応したり、家族から電話が来た時は取り次いでゆっくり話をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室内の温度も利用者に合わせて調整し、定期的に換気も行っている。利用者はホールで過ごす時間が多く、目の前で調理も行っているので音や匂い感じている。また、室内も季節感をだすために毎月装飾を工夫している。	食堂兼談話室の共有スペースは、南向きで広く明るく暖かい。職員と一緒に利用者が作成した季節を感じる折り紙が飾られている。ラジオ体操、カルタ取り、風船バレーなど皆と一緒にホールで楽しめるような工夫もしている。清掃は職員が行っているが、利用者も手伝うことがある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂ホールやソファで自由に過ごしたり、多機能ホームへ行ったりと利用者の状態に合わせて過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に、自宅で使い慣れた家具や馴染みの物を持ち込めることを説明している。また、利用者が作品作りを行い気に入った物を居室に飾ったり、家族から届いた写真を飾っている。	ベッド、洗面台、チェスト椅子が備え付けられており、家族写真、利用者作成の塗り絵、家族から送られた手作りマスクなどが置かれている。入り口に職員手作りの表札を掲げ、心地よく安心感のある居室となっている。居室清掃は、毎日職員が行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設設備は、安全面に配慮した作りとなっている。利用者の居室に名前を貼り自分の部屋とわかるようにしたり、トイレの場所にも張り紙をすることで一人で行くことができる利用者もいる。危険な箇所は職員が把握するように努めている。		